

Fukushima Hamadori Cinema Project 2024

2011年3月11日に発生した東日本大震災で甚大な被害を受けた福島県浜通り地区。10年以上が経過した今、ようやくすべての地域で避難指示が解除された。既に政府は地域住民の生業の再建や企業誘致に着手し、復興・再生に向けてさまざまな事業を推進している。

そんな中、映画24区は映画で新たな彩りを地域にもたらし、その魅力に惹かれる若者たちが集う流れを作っていきたいと、芸術・文化を通じた地域活性化イベント「福島浜通りシネマプロジェクト」を企画。第一線で活躍する映画監督やプロのスタッフたちを福島浜通り地域に招聘し、福島県内の地元市民および日本全国から集まった学生・若者たちと共に映画づくり体験に挑戦する。



映画「ぼくらのレシビ図鑑シリーズ」など、映画を活用した地域プロデュースを行う映画24区が2022年、経済産業省と共に立ち上げた「福島浜通りシネマプロジェクト」も2024年度で3回目を迎えた。

芸術・文化を通じ、新たな地域の独自性を創出すべく、映画づくりに向けた本プロジェクトは、震災から10年以上にわたり、全住民の避難が続いてきた双葉町において実施。福島第一原子力発電所における事故

の若手映画人、撮影・録音・編集などの影響で、今なお多くの住民が戻らないながらも、徐々に復興・再建が進む状況下、福島県内の地元市民および日本全国から集まった学生・若者たちが双葉町を訪れ、プロの映画監督とスタッフのサポートを受けながら、映画を完成させていく。

2022年夏、2023年冬に続く2024年度は11月13〜17日に開催。これまで4日間だった日程を1日延長、秋晴れに恵まれた5日間となった。(映画づくり体験)はA・Bチームの2班に分けられ、チームリーダーの映画監督、サブリーダーの若手映画人、撮影・録音・編集な

どプロの技術スタッフがそれぞれに配置される。加えて2班をサポートする本部も映画制作現場で活躍するスタッフを揃えたほか、映画24区のスタッフが参加。さらに今年度は、同プロジェクトに参加経験のある2人を学生リーダーとして迎え、事前合宿を敢行。同じ学生目線で、映画づくり未経験の学生たちを引っ張っていく役割を担う。

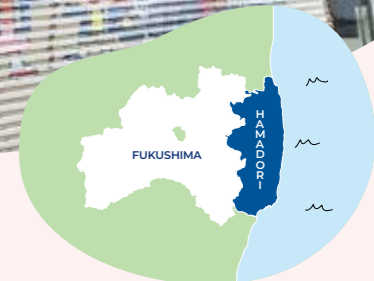


復興・再建が進む福島浜通り・双葉町にて

5日間にわたる映画づくり体験に挑む



Fukushima Hamadori Cinema Project 2024



三谷一夫

(株)キネマ旬報企画 映画24区事業部プロデューサー。映画スクールを運営する傍ら、映画・ドラマ・CMなどの企画・制作および配給を手掛ける。近年は全国の自治体や地場企業と組んだ映画プロデュース企画や作品に数多く携わる。

双葉町での映画づくりで生かされる人づくり、まちづくり

2022年度の夏に経産省からの委託事業としてスタートした「福島浜通りシネマプロジェクト」は、翌年から補助事業となり、今回で3回目の開催となります。

学生たちがカメラを向ける先にある双葉町の姿は年々さまざまに勢いで変化しています。

本映画プロジェクトは一過性で終わることなく、この先10年間、復興の中で移り変わる双葉町の姿を、創造性あふれる学生たちの目を通して、映画という形で記録し続けることに大きな意味があると捉えています。

と同時に、震災前から双葉町に伝承されてきた歴史や文化など、人々の心の中にある「変わらない双葉町」の姿も改めて見つめ直す機会になればと思います。

また、映画づくりはたくさんの人を巻き込んでいく性質を持っており、ここで生まれたコミュニケーションや人間同士の信頼関係は今後のまちづくりにおいても十分生かされることと思います。

そしてこのプロジェクトに参加してくれた学生たちが今後の浜通り地域のまちづくりに関心を持ち続け、ひいては近い将来、直接的・間接的な形で浜通り地域の発展に寄与してくれることを願っています。

さらにその先には地域住民の方々が積極的に映画プロジェクトを引っ張っていく立場になっていただき、近隣地域の皆さんが楽しみにしてくれる年間行事に育てていきたいと思っています。

Schedule

	11.13 水	11.14 木	11.15 金	11.16 土	11.17 日
7:00		朝食	朝食	朝食	朝食
8:00					
9:00		ロケハン	脚本づくり & 撮影	撮影	編集 & 発表準備
10:00					
11:00					上映発表会
12:00		昼食	昼食	昼食	地域住民との交流会
13:00	オリエンテーション	撮影	撮影	撮影 & 編集	振り返り
14:00					
15:00	ロケハン & 脚本づくり				
16:00		夕食	夕食	夕食	
17:00					
18:00	夕食				
19:00	脚本づくり & 撮影準備	編集	編集	編集	
20:00					

A team



市井昌秀

1976年生まれ、富山県出身。2004年に初の長編「隼(はやぶさ)」が第28回びあフィルムフェスティバルで準グランプリと技術賞のW受賞。代表作「箱入り息子の恋」(13)「ハルチカ」(17)「台風家族」(19)「犬も食わねどチャーリーは笑う」(22)など。



堀春菜

神奈川県出身。2014年「ガンバレとかうせえ」主演で女優デビュー。17年「空(カラ)の味」で主演を務め、第10回田辺・弁慶映画祭女優賞受賞。23年よりLIVE STAGE「ぼっち・ざ・ろっく!」でPAさん役として出演。映画最新主演作は「スミコ22」「はるの行き先」など。

B team



吉田康弘

1979年生まれ、大阪府出身。同志社大学卒業。2007年、映画「キトキト!」で監督デビュー。代表作に「旅立ちの島唄〜十五の春〜」(13)「かぞくいろ RAILWAYS わたしたちの出発」(18)、ドラマ「埋もれる」(14)「プラージュ」(17)など。



後藤美波

静岡県出身。大学で美術史を学んだ後、渡米して映画制作を学ぶ。コロンビア大学大学院フィルムスクール修了。日米で多くの短編映画を執筆・監督した経験を持つ。2024年公開の「ブルーイマジン」では脚本とプロデューサーを務めた。

本部



永田琴

大阪府出身。2004年「恋文日和」で商業デビュー。「シャンティ デイズ365日、幸せな呼吸」(14)「いけいけ!バカオンナ 我が道を行け」(20)、TVドラマ「ライオンのおやつ」(21)、東野圭吾「分身」(12)「変身」(14)「片想い」(17)など。



向田優

窪塚洋介主演「Sin Clock」(23)助監督や石井岳龍監督「ソレダケ that's it」(23)劇中コミック・アニメ作画などを務め、「ぼくらのレシバ図鑑」シリーズにもすべて参加。本誌表紙イラストレーションも担当。アーティストとしても活動中。

撮影 関将史

撮影担当作品に、市井昌秀監督「無防備」(09)「僕らのごはんは明日で待ってる」(17)ほか、「ベイビーわるきゅーれ ナイスデイズ」(24)では照明を担当した。

録音 鰐部晶太

録音助手で「かば」(21)、「フィリピンバブ嬢の社会学」(24)、録音で「The Chef & The Daruma (原題)」(24/日本パート)、「解離するヴァルネラビリティ」(24)を担当。

撮影 鈴木周一郎

撮影技師の藤澤順一氏、柴主高秀氏の現場を経て、佐々木原保志氏に師事。代表作「おしん」(13)、「わたしのお母さん」(21)、「高野豆腐店の春」(23)、ドラマ「ベンジョンメツア」(21)など。

録音 岸川達也

録音を担当した近作に「水深ゼロメートルから」(24)、「シンデレラガール」セフレの品格/決意・初恋」(23)、「オアシス」(24)では音響効果・整音も務めた。

編集 村山 暁

京都芸術大学映画学科15期生。俳優としても活動し「お笑えない芸人」(25)では出演・助監督を務めた。「SLIP」(23)では出演・演出・撮影・録音・編集を担当。

制作・車両 本間淳志

東京都出身。主な出演作に「校庭に東風吹いて」(16)、「21世紀の女の子」(19)、「すんと」(24)、ドラマ「サウナーマン」(19)など。

編集 ドニー・オルディアレス

フィリピン出身。映画監督。「ショートカット」(17)、「NENA」(20)ほか、10カ国のスタッフが集結して制作した日本=フィリピン合作映画「CROSSPOINT」が公開待機中。

制作・車両 芝博文

俳優として「うろんなところ」(17)「化け物と女」(18)、「愛がなんだ」(19)、「わたしの、途切れない物語。」(24) TVドラマ「オレは死にまっただけ!」(23)などに出演。



参加者 中澤莉胡(学生リーダー) 勝田桃歌/高尾優希/小波梨乃愛 齊藤瑤平/劉宇博



参加者 日高真優(学生リーダー) 荒川佳恵/岩崎桃果/柿原寛子 高木佑磨/伊丹光



今回は、地元住民・双葉町の人々にもこのプロジェクトを広く知っていただき、できるだけ多くの方に当事者として関わっていただければと、事前にポスターを作成。11月13～17日に第3回「福島浜通りシネマプロジェクト2024」映画づくり体験を双葉町で開催するおしらせとともに、「映画にいっしょに出よう!」とエキストラ出演の募集をかけた。また、上映会開催の告知も同時に行い、ポスターからこれまでの作品、情報をチェックできるQRコードを掲載した。

ポスターは10月末にリーダー合宿が行われた際、学生リーダーたちが公共施設や役所に直接赴き、掲示を各所に依頼した。避難指示が解除され、徐々に住民が戻り、移住者が増え始めた現在だからこそ、本来の目的である映画づくりを通して、地域の活性化、未来のまちづくりを考える一助になればとの願いを込めた。

結果、本プロジェクト初の双葉町住民のエキストラ参加による撮影が実現。上映会もこれまで以上の集客が望めた。



全体進行を務める向田優氏、全体統括の三谷一夫氏らと共に、地図や新たな資料を見ながら、撮影候補地を検討する。双葉町を訪れるのは昨年以來だが、駅西地区は住宅が整備されるなど、人の気配がほぼなかった町が徐々に息を吹き返している実感も。本プロジェクト告知ポスターは自ら掲示。

新たな試みでさらに充実! 学生リーダーによる事前合宿

これまで以上に、学生たちの手による映画づくりができればと、今回、参加者の学生たちの中から学生リーダーを選抜。Aチームの中澤莉胡さんは第1回から本プロジェクトに参加、Bチームの日高真優さんは第2回からの参加と、いずれも複数回以上の映画づくり体験となる。当初、高校生だった二人も今や大学生。二度にわたる貴重な体験が、新たに参加する映画づくり未経験の学生たちの良きアドバイザーになるのではと、白羽の矢が立った。

2人は10月末に本部スタッフとともに双葉町入り。1年ごとに変わる景色に改めて驚いた様子だった。それだけロケハン、打ち合わせに力が入る。2年前には見なかった子どもたちが遊ぶ姿に驚きながらも、エキストラ参加を呼び掛ける熱心ぶり。双葉町との新たなつながりも期待される。

リーダーズワークショップ



映画づくりのために集まった参加者はほぼ映画づくり未経験者。オリエンテーションを通して映画制作の説明を受け、早速、脚本づくりへ。

日本全国から集まった参加者はみな初対面。初めて双葉町を訪れる人がほとんどで、中には「東京以北に行ったことがなかった」大阪出身の学生も。「東日本大震災の傷跡がそのまま残り、人がほとんど住んでいない町が存在していることに驚いた」人も多かった。被災地の人々が恐れるのは震災の記憶が薄れること。避難指示が出ていた地域のことを知らない若い世代が本プロジェクトに参加し、福島浜通り・双葉町を訪れることによって被災地の現実を知ることとはとても意義深いことと思う。

JR双葉駅に集合した一行はバスで、双葉町産業交流センターにあるコワーキングスペース「FUTA B Aポイント」へ。本部スタッフの挨拶に続き、各人の自己紹介が行われた。緊張のせいか、ぎこちなさが残る。5日間を通してロケハン、脚本づくり、撮影、編集、観客を入れての上映会と、映画づくりの全工程を完成させることは、一見無茶なよ

うにも思える。だが、プロのスタッフたちのサポートを受けながら、同世代の仲間たちと力をあわせれば、必ず成果は得られる。まずはコミュニケーションを取る事が大切と、オリエンテーションが行われた。

「人生は嘘がないと生きていけない。最高の嘘は映画をつくりましょう」(市井昌秀リーダー)、「映画づくりに正解不正解はない。すべては自分次第。後悔のないように」(吉田康弘リーダー)、「発言を恐れず言いたいことは言う。お互いのことを頑張って信頼していきましょう」(永田琴SV)と、リーダーを務める3人の監督たちの言葉に熱心に耳を傾ける学生たちの姿が印象的だった。

さらにチーム分けが発表となったこの日から脚本づくりがスタート。みんなで夕食前にロケハンに出かけたときの感想をもちより、まずは意見を出し合う。ホワイトボードに書き出されたワードから、完成する映画のイメージを固めていった。

居住人口ゼロの状態が10年以上続いた双葉町には、ほかの町には見られない風情が漂う。今しか撮れない撮影場所探しにも力が入る。

物語を組み立てるうえで重要になってくるのは、舞台となる撮影場所。初日はみんなで海や神社、駅周辺、壁画が点在する街中などを一通り見て回り、作りたい映画のイメージをそれぞれ膨らませていく。

「2時46分で止まっている時計、消防署のひんまがつたままのシャッターなど、5m歩くとたびに心が動かされ、言葉にできない感情が生まれた」(荒川佳恵さん)「新舎と旧舎が並んでいる——過去と今をつなぐ象徴のような風景が衝撃的だった」(伊丹光さん)「壊されることを前提に描かれた壁画は今、ここでしか撮れない映像」(高尾優希さん)と、初めて訪れる双葉に感銘を受ける参加者も多く、それがどう映画づくりに生かされるのか、気になるところだ。

Aチームは「安全・安心第一」「少数派を排除しない」「常識を疑う」方針を市井リーダーが示唆。自主的に意見が出てくるのをじっと待つ姿勢を貫く。一方、Bチームはロケハン

途中に遭遇した美しい夕焼けを見ながら、「この美しさを撮影する時間はほんのわずか。狙って一カットくらいしか撮れない」と、撮影を念頭においた吉田リーダーからの情報を共有する。

いずれのチームも「震災」や「復興」というテーマに縛られることなく、自由な発想で意見を交わしていくのが頼もしい。それぞれロケハンで感じたことをそれぞれ発表し合い、書き出されていく数々のワード、付箋の多さにも圧倒される。

脚本に落とし込んだら、次は撮影準備へ。順撮りで撮るか、効率よく撮っていくかによっても撮影工程・手順は変わってくる。再びチームごとに撮影スケジュールを話し合い、何が必要なのか、どんな段取りを進めていくかを念入りにチェック。実際3日間という限られた時間を有効に活用するべく、ロケハンで得た情報を基に、早くも2日目の午後からの撮影に備えた。

脚本づくり



初日から2班のグループに分かれ、早速、脚本づくりのミーティングが行われた。膝を付け合わせて意見を出し合い、ホワイトボードに付箋を貼り付けていくAチーム。その作業に熱がこもる。

オリエンテーション



映画がどのようにして作られるのか、基礎を知っておこうと永田琴SVによる「映画づくり講座」を実施(写真右上下)。三谷一夫統括の挨拶(写真左下)に続き、全体のスケジュールを掴んでもらおうと向田優氏が説明する(写真左上)。

B team



Bチームの初日の脚本づくりは会議室にて。「キャラクターを表現する方法に食べ物を使うのは効果的」と吉田康弘リーダーのアドバイスにみな納得。持ち寄った小道具、衣装も視野に入れ、物語の基になるワードやシチュエーションが書き込まれていく。



オリエンテーションでは自己紹介が終わったあと、映画づくりに欠かせないコミュニケーション力を高めようと、自発的にジェスチャーあてクイズを実施。静かだった最初のミーティングとは打って変わり、一気に和気あいあいと打ち解けムードになった。あちこちで笑いが起き、いろんな提案や意見が出るなど、初日は思えない充実ぶりに、誰もが安堵したところだろう。



ちょうど1年前の2023年11月、双葉町図書館に誕生したOVER ALLs (@overalls_art)による新たな壁画「NANAKOROBİ-YEAH-WOW-KEY!」(写真右)。途中で降りたままのシャッター、手入れの行き届いた神社など、変わらない町の風景と新たな町の象徴となった風景を重ね合わせていく。



ひたすら町中を歩きながら、撮影のイメージを固めていく。町民にとっては単なる通り道、たとえば地下道の空間でさえも画づくりに生かそうと、メンバーが意見を交わしながら検討していく。町に点在する巨大な壁画アートは青空の下、広い空間に映える。今の双葉を象徴する風景のひとつ。



双葉町の玄関口となるJR双葉駅とその周辺をロケハン(写真上)。初日はまず、地元の方の説明を聞きながらみんなで回っていく。復興を見守る守り神として町民の心の拠り所として親しまれる「相馬妙見宮初發神社」(写真中)。2023年4月にグランドオープンした新名所、浅野燃系 双葉事業所「フタバスーパーゼロミル・エアーかおる双葉丸」も新たなロケ地候補に(写真下)。

ロケハン、脚本づくりが終わり、映画づくりのメインとなる撮影にシフト。演技指導・さらに撮影・録音の技術指導を受けながら撮影は進む。

脚本があがったらいよいよ本格的な撮影準備へ。プリントアウトした脚本はチームのメンバーはもちろん、本部スタッフとも共有し、撮影プランを具体的に練っていく。分刻みの撮影スケジュールには、どこでどのシーンを撮影するかを明確に表記、効率良く動けるよう配慮する。

Aチームはシーンにあわせた衣装・香盤表を作成。演者にシーンで使う衣装を着用してもらった写真を資料に入れ込む力の入れよう。Bチームも商業映画で使用されているものと遜色ない香盤表が作成され、撮影がスタートした。

現場には本格的なカメラや録音機材が用意され、技術スタッフが基本的な操作方法をレクチャーする。実際にするのは初めてというカチンコの打ち方も教わり、最初はこわこわだった機材の扱い方も撮影が進むにつれ、どんどん様になっていく。

Aチームは撮影2日目、ナイトシーンを決行。全国的に気温が高

かった晩秋だったが、さすがに福島の夜は肌寒く、防寒と安全対策をしっかりとったうえで迅速に行われた。静謐な夜の神社の灯りが神秘的に映り、満足のいくシーンになったのではないだろうか。また、翌日は本プロジェクト初のエキストラを呼び込み駅前前で撮影。わずかなシーンではあったが、住民参加が叶った記念ショットとなった。

一方、Bチームは上司と新入社員、高校同窓生3人組、別れ際のカッブルと3つのストーリーが交錯。6人総出で出演、出演シーンがないときはスタッフに回るローテーションに。3人組が車に乗るシーンなど、車内の様子が外から映しにくい難易度の高い撮影にも果敢に挑戦した。カメラ位置も思い思いの場所から撮影、それぞれの個性が光る。カップルをすすきの草むらに入って撮影した柿原寛子さんは「すすきに同化した」の興奮気味に語った。

シーン、手持ちで被写体を回り込みながら映したシーンのほか、カーブミラーに映ったシーンをうまくつないで流れをつくることにも集中した。早朝、夜の撮影と時間がとられる中、どうしても編集作業は夜中になりがち。睡眠時間を削りながらの作業が続く。

Bチームは「波の音」がテーマになっただけに、録音にも力が入る。ラジオから流れる「波の音」がリスナーを感動させるものでなければならぬ。さらに、DJブースで流れる音楽、海での回想シーンのバックに流れる音楽をどうするか。あわせて海岸での回想シーンも他のシーンと差別化を図るべく、撮ったシーンをポップに加工していった。

最終日の上映会は11時から決まっているだけに、最後は時間との戦い。エンドクレジットに入っている名称を本部スタッフが最終確認し、なんとか間に合わせることで、怒涛の映画づくりが無事終了した。

映画の出来を左右する編集作業。撮りだめた素材をどう生かし、つないでいくか。専門の機器を使いながら、完成に向けての作業を進める。

その日に撮影したシーンは夕食後、各チーム全員で見ること。自らの演技を見ながら「瞬きが多い」「視線が定まっていけない」など、次々と反省点があがっていく。ワイヤレスマイクで録音された音もあわせてチェックし、アフレコが必要なシーンを確認していく。今回はそれぞれのチームに編集の技術スタッフが

がついているだけに心強い。どうしても現場では撮影することが集中しがちだが、編集作業をしながら「つながりをイメージしつつ、編集しやすいように考えて撮ることも大切」と、参加者たちは編集作業を通じて学んだ。

編集は撮影した素材をどう切っただうつないでいくかも重要だが、効果音やアフレコの収録、タイトルをどうみせていくか、エンドクレジットの入れ方、選曲など、細かな作業が必要とされる。

Aチームはカメラをフィックス(固定)して人物に寄って撮影した



海岸、川岸、駅周辺ほか、産業交流センター、さらにはバスを運行する東北アクセスのオフィスを借りて撮影。それぞれのシチュエーション、光加減を生かしていく。吉田リーダーは撮影における専門用語を説明しながら、撮影手法のいくつかを提案。その中から、ベストのショットを決めていく。最後の海のシーンは3ストーリーそれぞれの回想シーンだけに、はじけた演技が求められる。気持ちをほぐすために大きな声でしりとりをしたことも思い出深い。



メインの登場人物を3人に絞り、彼らの関係性についてもみんなで意見を出し合いまとめていく。さらに主な舞台を神社とその隣の部屋に定めて撮影をスタート。実景の撮影も朝の光の中で撮影した。



野外以上に気を遣うのが部屋の中での撮影。狭い空間の中、どこにカメラを配置し、アングルをどう狙うかを決めていくのもポイント。車を使った撮影も。



DON'T BE AFRAID TO HAVE FUN

最終日の5日目。完成作品を関係者ほか一般のお客様に披露する、本プロジェクト最大のイベントを産業交流センターにて開催。



「福島浜通りシネマプロジェクト」と書かれた大判紙には多くの寄せ書きが！いずれも双葉への思いや感謝に溢れるコメントで埋め尽くされた(写真上)。

過ぎてしまえばあっという間の5日間。緊張感がとぎれることなかった映画づくり体験だったが、それを締めくくる上映&発表会が11時より開催された。会場入り口には手作りの案内板も掲示。今年も晴天に恵まれ、双葉町の人々や撮影に協力した関係者で会場は満席となった。各チームともぎりぎりまで追加撮影やアフレコ、編集作業を行っていたため、誰もが完成作品を見ていない状況の中、映し出されたオープニング映像を会場全員が固唾をのんで見守り、作品に映し出されたドラマに盛大な拍手が贈られた。



上映会にはエキストラで出演した双葉町在住の子どもたちも参加し、最前列で鑑賞。撮影にかかわった双葉町の人たちをはじめ、一般のお客様も来場する盛況ぶりを見せた。

高真優さんは「Aチームの感動コメントを聞いている時から涙が溢れ、自分たちの作品がまともに見られなかった」とチームの垣根を越えて苦労を労い、作品の完成を喜んだ。双葉町の素晴らしい風景や出会った人々にインスパイアされて完成した作品、映画というモノづくりを通して、未来のまちづくりを考えるきっかけにつながった手応えを感じられる上映発表会となった。

「こだわり抜いていきましょうとは言ったけど、こだわりすぎてスタッフの気が狂いそうになる瞬間も。人生嘘がないと生きていけない。最高の嘘ができた、マジで感動しています。楽しむことを恐れるなといった彼らの思いも届けられました」
市井昌秀リーダー

「僕らが作った作品はとても繊細で綺麗な物語だと自負。どう良くていこうかと、それぞれ全力全身で作品と向き合い、役割をこなしていった結果が今上映されたことに感動しました」
Aチーム・齊藤瑤平

「学生リーダー合宿でみたび双葉を訪れた時、2年前には考えられなかった子どもたちが遊んでいる風景に感動しました。日々変わっていく双葉で撮った作品は世界の一つの奇跡です」
中澤莉胡・学生リーダー

「撮影や録音などをやってみて、映画づくりは幸せな仕事だと思いました。毎日2〜3時間しか寝られなかったけれどいろんなことができた。みなさん、限界まで夢を追いかけてください」
Aチーム・劉宇博

「双葉町って何？4泊5日で映画を撮るってどういうこと？震災で全域立入禁止となった町が復興し始めている。映画づくりを通して知らなかった多くのことを学ぶことができました」
Aチーム・小渡梨乃愛

「この町で感じたことをみんなで言い合い、それを紡ぐような形で脚本をつくり支え合って完成させました。映画づくり以上のものを持って帰ることができたのでは。人生の良い機会に、中身の濃い有意義なプロジェクトだと自画自賛しています」
吉田康弘リーダー

「最初の印象はめちゃ静かだったのに、緊張がはぐれて話し合ったら止まらない。みんなクセ強すぎ。予期していなかった化学反応がこの映画の上で生まれたと思いました」
Bチーム・伊丹光

「普段見ている風景とは別の風景が見られました。こういう形でみなさんと交流できるんだと再認識。双葉町はもっと変わっていきます。ぜひまた映画を撮りにきてください」
ロケ施設協力者



「中澤莉胡さんと共に学生リーダーとして参加、双葉町の方々と話す機会も多く、今日どうい言葉伝えようかと思っていました。作品を見ていただき、些細なことでも楽しいと思える経験を持ち帰っていただけけると嬉しいです」
日高真優・学生リーダー

「双葉町も芝居も映画をつくるのもすべて初めて。日々変わる双葉町で同じ映画を撮ろうと思ってきくと撮れないでしょう。今の双葉町だからこそ撮れた。スタッフ、クルー、観客の皆さんを含めて一つの映画ができたと思います」
Bチーム・高木佑磨

「楽しく拝見。素晴らしい経験をされたのだと思います。これからも続けてください」
上映会参加者



FM 73 (17分)



出演
高木佑磨(ユウマ)、日高真優(マリ)、岩崎桃果(ルリ)、柿原寛子(フミ)、伊丹光(カイト)、荒川佳恵(ヒマリ)、芝博文(DJバッシー)、永田琴(ディレクター)、萬田愛子(AD)、四宮義斗(タナカ)、後藤美波(ミナミ)

STORY
こけし製造会社で働くユウマはミスをして上司に怒られ、落ち込んでいた。一方、高校の同級生マリ、フミ、ルリはラジオから流れる波の音から元彼の話になり、同じ男に三股をかけられていたことを知る。そして、地元に残りたいヒマリと上京を決めた恋人のカイト。カイトが旅立つ日、二人は双葉駅へと向かっていた。



DON'T BE AFRAID TO HAVE FUN (19分)



出演
勝田桃歌(ケイト)、小渡梨乃愛(ケイトの友達)、中澤莉胡(ケイトの友達)、劉宇博、高尾優希(観光客カップル)、齊藤瑤平(???)、松本希愛、綾部蒔千、綾部とき(双葉町の子供達)、齊藤泰道(双葉駅の利用者)

STORY
社長の管理をしながら、隣の部屋で寝起きするケイトは時間があればひたすら折り紙を折っていた。ある夜、ゴミを出そうと外に出ると、一人の女性が泥酔して境内で眠り込んでいた。ケイトは何度も彼女を起こそうとするが、微動だにしない彼女をなんとかひっぱって自分の部屋に入れて布団をかけてやるが……。



Fukushima Hamadori Cinema project 2024



経済産業省

ハマカルアートプロジェクト2024

キネマ旬報企画 映画24区

地域プロデュース事務局

TEL : 03-6264-3880

公式HP : fukushima-cinemaproject.jp